

音楽に生きる

日本人ヴァイオリニスト桑野由紀は故郷でヴァイオリンへの愛情を見つけ、大いなる自己鍛錬とともに東京とミュンヘンの大学での研鑽に備えた。2010年からはエッヒングで教えている。



「私はとても小柄なので楽器が大きすぎるぐらい」と桑野由紀は言う。これによって腱鞘炎を引き起こしたこともあった。

記事 ユリア キッツマン

エッヒング - 「ヴァイオリンの響きは魂の鏡」と桑野由紀は言う。「奏者が幸せなときはヴァイオリンもそのように応えてくれる」彼女の瞳は輝き唇には微笑みが漂っている。彼女の話聞いていて感じること：この日本人女性は自分のしていることで幸福である。音楽のために生きている。2010年以来エッヒングのムジークシューレ（音楽学校）の講師であり、またドイツやスイス、日本で演奏活動を行っている。音楽の魅力 - 桑野由紀は幼い時から感じていた。5歳のときにピアノを弾き始めた。それはイタリアであった。「そこでは父が技術者として1980年代初めに働いていたのです」と流暢なドイツ語で語る。「私は小さかったけれども、当時すでにヨーロッパの生活に影響を受けていました。例えばイタリアの幼稚園に通っていたり。」ただ学校後の自由時間もたいてい家の中で過ごした。「南に住んでいて治安も良くなかったから、簡単に道端で遊ぶというわけにはいかなかったのです。」そこで代替りのものが必要となる。「母がピアニストで。それでピアノがそこにあったわけです。」そうして母親から音楽の初めの手ほどきを受けた。後になってこれが音大の入試にも役に立った。日本に帰国してからはしかし「自分から言いました：ヴァイオリンを弾きたい」

彼女はかつてはオーケストラ団員であった、「でも退職するまでずっとそのままでいたくなかった」と語る

12歳の時に初めて「フルサイズのヴァイオリン」を与えられた - というのも子供はまず生徒用の小さい楽器を弾く。これをきっかけに、音楽を学んでいきたいと心に決まった。「その大きな響きを聴いた時に、私に新しい世界の扉が開かれました」特別な重圧感があったか？というのもアジアでは子供たちに最高の成績を上げさせるために、極端な訓練がされるとよく言われる。「何かを学

ぶということ - 日本では自己鍛錬も意味しています、少なくともそうでした」そう言い、また付け加えて「でもこの気持ちがなかったら、今、私はここにはいないと思う。」この音楽家は説明する：「その国にいれば普通のこと。しつけや教育は特別に厳しいとも思いませんでした」ドイツで教えるようになって初めて、故郷での成績向上に対するこの姿勢を意識するようになった。「日本では、少なくとも私が学生だった当時は、先生のレッスンに対して準備していくのが当然でした」と彼女は言う。そして笑いながら告げる：「ここではまったく違う。子供たちは私のところに来て言うの、ぜんぜん練習しなかったって。恥ずかしげもなく。」

彼女自身は子供のとき毎日1時間練習していた。 - 15歳、16歳の頃などは休暇のときなどさらに7~8時間。自ら進んで - 目くばせして強調しながら言う。「これは人にはお勧めしません。でも当時の私はそれで正しいと思っていました。」

青年期にヴァイオリンへのやる気がなくなった時期はあったか？ 桑野由紀は困惑したような表情。

「いえ、まったく。」それどころか、ある時は練習のしすぎで腱鞘炎になった。彼女はにやっと笑い「私は体が小さいので、楽器が大きすぎるぐらい。だからその怪我をした後、苦痛のない新しい奏法を学ぶようになりました。」高校卒業後、東京藝術大学で学ぶ。20代はじめに「アジアユースオーケストラ」でヨーロッパ演奏旅行に出かける。「その時に初めてドイツを訪れました」と語る。大学卒業後、私立音大の講習会で、ミュンヘン音大で教鞭をとっていたクルト・グントナー氏のレッスンを受けた。「将来への方向付けとなった出会いでした」そう桑野は言う。そのレッスンがとてもよかったことで、是非続けて彼のもとで学びたかった。「グントナー先生にお手紙を書きました。その後先生は私を様々な講習会に誘ってくださり、再び何度かドイツを訪れることになったのです」と説明する。

2002年、マイスタークラスで研鑽を積むために、ついにミュンヘンに来る。それ以前の2年間を準備に過ごした。お金を稼ぐためにヴァイオリンを教え、ドイツ語を勉強した。「聴覚の独学勉強法で」笑いながら付け加えた。「田舎に住んでいたのだから近くに語学学校もなかったのです。それでラジオ放送の語学コースで学びました。」ミュンヘンではすぐに生活に馴染み、友達もできた。バイエルン方言までも覚えた。新たな文化を異質に感じたことはなかった：「私は、評価したりこれは異質だと言ったりしません、何でも吸収。それでいて合わないものはとらなければいい。」日本の恋しいものはないかという質問には、桑野由紀は長く考え込んだ。インターネットのお蔭で家族や友達とのつながりも密接なうえに、正月など一年に一度は帰国する。それでも何かあったらよいなと思えば、日本の温泉。

桑野由紀のヴァイオリンは1738年にパリで製作された

挙句の果てに、ドイツでは全く違うというものを思いついた：レストランでの一皿の量。「渡独した当初、飲食店で注文したら、きのこだけの山盛り、ソース付がきたの - それはショックだった」笑いながら語る。「日本では料理の見た目の美しさも大切にします、例えば様々な色彩を組み合わせたり。」10年以上のドイツ滞在で食べ物の好みはどうなったか？寿司または白ソーセージ？「それは場合によります：ここでは白ソーセージも喜んで頂くし、一方でとても質の良いお寿司だったらそれも断れない」彼女は外交的に言う。

桑野は日本への完全帰国も、ドイツに居続けることも可能性から排除していない。「どこに住むかは私にとってあまり重要でないのです。その場で私に与えられている課題が大事。その課題が満たされていれば、その場が私のふるさとでもあります。」そして2010年からはエッヒングに住んでい

る。意識して音楽教師としての仕事を選んだ。「それ以前の3年間、オーケストラの団員として仕事をしていましたが、それは年金生活に入るまで続けたいわけではありませんでした。というのも、そのままでは音楽が私にとってマンネリ化してしまうような気がしたので。」そして今の仕事では全く違って：「予測できないことがいつもあります。私がいつも準備しておくことは、自発的で柔軟であることです。」彼女にとって、まさにそこに仕事の魅力がある。それどころか生徒からも沢山学ぶ。「レッスンは私にとって一方通行の過程ではありません。お互いの交換です。」

音楽教育の価値に対しては確信を持っている：「音楽は人生を豊かにしてくれるもの、喜びや楽しさももたらしてくれる。子供たちは楽器だけでなく、向上のために努力することや物事をやり抜く能力も学びます。」彼女の目的は、強制はせずに「音楽を体験することの素晴らしさ」を教えること。と同時に「それぞれの生徒の精神まで届くこと」。彼女は小学1年生から18~19歳までの生徒を見ている。大事なものは、「すぐに拒否しないでまず聞いてあげる」。最近の出来事を微笑みながら話した。小さな男の子がレッスンに来て、ヴァイオリンよりむしろギターを弾きたいと洩らした。「それで弓を使わずに、私たちはヴァイオリンをはじいて練習しました。」

教師としての仕事のほかに、演奏活動もしている。個人的な目標は、一年に一度自ら催す演奏会。それ以外の公演は招待されて演奏する。日本でも舞台上がる。「前は5月に演奏しました。友人知人、家族親戚が一度に沢山来てくれます」と桑野は誇らしげに言う。スイスでは山登りの仲間とヴァレー州の村を訪れては、定期的に演奏している。音楽家がいるのなら演奏会もしようと思いついた仲間がいたのだ。「毎年演奏しているので、だんだん知られてきて沢山の聴衆が来るようになりました」と彼女は喜ぶ。

今年はエッヒング音楽学校の室内オーケストラを初めて指揮する。演奏会は6月。本番は彼女にとっていつも特別なハイライト：「人前で演奏すると、私自身を知ることができます。自分自身への道のようなもの。」緊張することは彼女にはない。ただドイツで舞台上立つほうが楽だとも認める。「もしかして日本では無意識に自分にストレスをかけているのかも」考えて、「こちらではより自由に演奏できる。」演奏する - 桑野の願いは「年をとったおばあさんになるまでずっと」。

使用している楽器は彼女が18歳の時からのもので「両親からの偉大なる贈り物です」。1738年にパリで製作された、それはバロックの時代である。あるときに桑野の恩師の同僚がそのヴァイオリンを日本に持ってきた。「そして私と共にまたヨーロッパに戻ってきたの」と語る。いつかその楽器の歴史をたどりたいたいとも思っている。「パリの住所もわかっています、是非そこに行ってみたい」。